

## 石巻専修大学避難所におけるこども支援 —「こどもの絵本の庭」の活動を通して

石巻専修大学教育会  
教科教育(初等・中等)研究部会  
根本 泉

### Support for Children at Ishinomaki Senshu University Evacuation Shelter: Studied through the “Child’s Garden of Books” Temporary Library Project

Izumi NEMOTO

*Research Group for Subject Teaching of Elementary and Secondary Education  
Ishinomaki Senshu University Educators’ Society*

#### はじめに——こどもの集う広場の設定

2011年3月11日の東日本大震災の直後から、津波および浸水の被害を免れた石巻専修大学は、多くの避難者を受け入れ、避難所としての機能を果たしてきた。避難者が最も多かった震災から1週間位のピーク時には、その数が1,000人を超えていた<sup>(1)</sup>。そのような中、大学の事務職員が中心に外部からの機関や人々に対応し、避難している本学学生もボランティアとして活動した。市街地の瓦礫の撤去、バス等の交通機関の渋滞の幾分か緩和により、大学への通勤の条件がある程度整ったのは、3月末になってからであった。

本学には、「石巻専修大学教育会」という組織がある。これは、中学校・高等学校の教員である本学卒業生および教職課程担当の本学教員から成り立ち、教育課程の研究活動推進と情報交換とを目的とした組織である。本年2月に、その下部組織として、「教科教育(初等・中等)研究部会」(以下、「研究部会」と略記する)が立ち上げられた。これは、本学にはまだそのような課程のない、主として初等教育の研修を積むための場として設けられたものであり、本学の教職担当の教員および理工学部の一部の教員と事務職員を中心に構成されている。本研究部会のメンバーである今野久男事務部次長の発案により、この部会の活動として本学避難所のこどもたちの支援を行うための、最初の準備の会合が持たれたのは、4月1日であった。活動としては、絵本の読み聞かせ等を中心に考えたため、本学図書館にも協力してもらうこととなった。

準備の打合せに出席したのは、理工学部の大谷尚文教授、山崎省一教授、事務部の今野久男次長、齋藤元樹主任、そして根本の5名であった。研究部会が本学避難所における活動の目的として掲げたのは、以下の2点である。

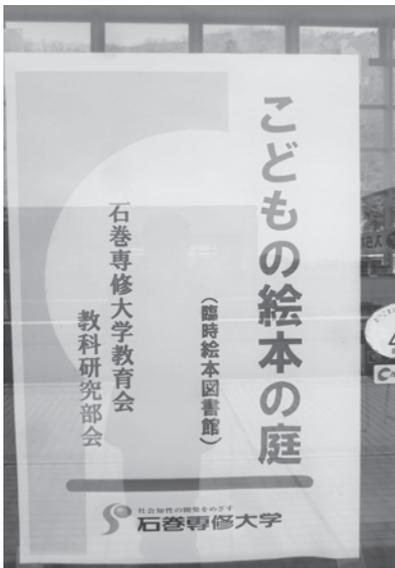
- (1) 現在、本学および(本学よりも多くのこどもたちがいる)近隣の石巻商業高等学校の避難所で生活しているこどもたちの学習支援の一部として、読み聞かせ等文化的な支援を行い、心の糧となるようにする。
- (2) 震災のために中断した本研究部会の活動を活性化し、新学期における研究につなげる一助とする。(本研究部会では、3月より女川第一小学校および第二小学校との教育研究の連携が始まり、各校との最初の研究会が行われたところであった。)

また、支援の期間としては、本学および石巻商業高等学校に避難所が設けられている期間(概ね4月末日まで)とすることとし、支援の方法としては、本の読み聞かせ、レクリエーション、ストレッチの場の提供、等を行うこととなった。支援を行う場所は本学4号館2階のエントランスホールとし、日時は、週2、3回、午前10-11時と午後2-3時とすることとなった。

なお、本学図書館の協力で、絵本の蔵書から91冊を本研究部会に貸与してもらえることとなった。これらの絵本は、よく選び抜かれた作品であり、大学図書館が「絵本」というジャンルをも網羅していることの意義を改めて考えさせられた<sup>(2)</sup>。また、スポーツ生理学専攻の山崎教授は、体育館より、レ

クリエーション用に、ストレッチ用のマット、バドミントンの用具、ボール等を提供くださった。

この企画の名称は、「臨時絵本図書館」としての働きを兼ねることから、「こどもの絵本の庭」と決まった<sup>(3)</sup>。名称決定後、今野次長が色刷りのきれいな大判のポスターを2枚作成し、1枚をエントランスホールから2階のデッキに通じる出口付近のガラスに貼った。もう1枚は、1階から階段を上った所の、ホールに通じる入口のついでに貼った。こうして、外から見ても、中の避難者から見ても、何かの企画が行われているという、かたちと雰囲気はまずで上がった。



4号館2階のエントランスホールの出入口付近に貼られた「こどもの絵本の庭」のポスター

次に、図書館からの絵本は、図書移動用のカートで運び込み、エントランスホールに置くこととした。(企画の第1日目に、根本が自宅の絵本を11冊貸出し、これも加えて利用することとなった。)ただし、ホールは不特定多数の人が出入りする場所でもあり、図書館の蔵書については、紛失を避けるため、企画の行われる時間帯のみ設置し、その日の終了時にエントランスホール隣の講堂に収納することとした。さらに、準備の最後の段階として、内部および外部に向けての、企画の立ち上げについての情報の発信を行った。それは、主として以下の3点である。

- (1) エントランスホールに隣接する4号館の本学避難所に足を運び、見かけたこどもに声をかけ、友だちも誘って企画に参加しては、と呼びかけた。また、避難所の受付に、出入口に企画の掲示をしてくれるよう依頼した。
- (2) 事務課広報係に、石巻記者クラブへの連絡をお願いした。
- (3) 文部科学省の「東日本大震災 子どもの学び支援ポータルサイト」に、教科教育(初等・中等)研究部会として、「こどもの絵本の庭」を通して提供できる支援についての登録を行った。

こうして、いよいよ支援実施の段階にこぎつけ、打合せで決めた日時にしたがって担当者を割り振ることとなった。

以下においては、4月2日(土)を初日として開始した「こどもの絵本の庭」の実践の記録とそれに基づく考察とを、三つの段階に分けて報告したいと思う。すなわち、(1)立ち上げの時期の様々な反応、(2)安定した時期に求められた支援方法の修正、(3)支援の終了が近くなった時期の活動状況と残された課題、の3段階である。

### 1. 豊かさや安らぎの場の回復——立ち上げの時期の様々な反応

いずれの企画においても共通する現象であろうが、「こどもの絵本の庭」の初日は、充実した内容で、こどもたちの参加もよかった。この日に集まったこどもたちの内訳は、就学前の幼児(以下「幼児」と記す)女子1名、小学生男子3名・女子2名、中学生女子1名の計7名であった。(以下においては、こどもの人数については、女1、男3のように略記する。)

この日は、山崎教授が早めに出勤し、エントランスホールの掃除からテーブルの設定まで、献身的に準備くださった。このような働きが、ひとつの企画を動かす上でいかに大きな助けであり、不可欠なものであるかを実感させられた。また、初日に、絵本に詳しい、仙台市在住の根本道子氏の協力が得られたことも、スムーズに企画を立ち上げる上で力となった。折しも、広報係の働きかけにより、三陸河北新報社の取材も重なり、支援

と取材への対応を並行して進めざるを得なかったため、協力者が得られたことは幸いであった<sup>(4)</sup>。午前中は、絵本の読み聞かせ（個人に対するものと全体に対するもの）、色鉛筆などを用いての「お絵描き」等が行われた。ただし、このような活動について素人の私たちにとって、子どもたちに実りある時を提供することは難しく、最初は、子どもたちと一緒に時を過ごすのが精一杯であった。

そのような不十分さにもかかわらず、「こどもの絵本の庭」を立ち上げたことによる最初の効果は、主として二点あげることができる。その第一は、避難所の一角にこれまではなかった、子どもを中心とする、ある明るい空間、広場ができたことである。それは、周りの大人に対しても変化をもたらさずにはおこななかった。この広場は、大人にとっても、くつろいだ、心豊かな場所となった。第二は、子どもたちの存在がクローズアップされることによって、この広場に、ボランティアの方々が、子どもたちへの奉仕のために訪れるようになったことであった。リサイクルの品で走る模型の車の作り方を教えてくれる方、プラスチック製のミニチュアの家等のおもちゃをプレゼントしてくれる方など、様々な技術と品物を贈ってくれる方々が現れた。そのような方々の中で、当時石巻高等学校避難所で「にじいろクレヨン」というグループで子ども支援を行っていた柴田滋紀氏が訪問され、絵本の読み聞かせを含むご自身の活動を紹介してくださると共に、協力を申し出てくださったことは、その後の「こどもの絵本の庭」の活動に、ある規律と長続きするよい刺激を与えてくれることとなった。

こうして始まった活動は、第2回目が、休日の4月3日(日)であったが、山崎省一教授が担当してくださり、事務部事務課の佐藤彰桂課長も出てくださるなど、協力をいただきながら最初の4日間継続して行われた。(4月4日(月)まで山崎教授が担当し、4月5日(火)に根本も加わった。)

第4日の4月5日(火)は、これまでの子どもたちに加えて、高校生(男1)、高校卒業生(男1)も参加した。エントランスホールには、バドミントンを行える程度のスペースがあり、この日は、これらの高校生たちが、子どもたちのスポーツの相手をしてくれた。

この日までの、子どもたちにとっての環境の変化は、どなたかがいくつもの小型のゲーム機とそれらのソフトを提供してくれたことであった。どうしても、子どもたちはゲームに興味を持ち、本等への集中度が減ってしまう。様々な外部の人たちが出入りする環境で、ある企画を実施することの難しさを実感させられた。しかし、この日の午後、担当者(根本)が、その場で読書をしていると、子どもたちがこれに反応し、彼らが担当者に本を読んでもらった。また、共に絵を描く時間を持つこともできた。このような経験を通して、遊び道具がいろいろと提供される中でもなお、子どもたちが、人対人のコミュニケーションを求めていることを確かめることができた。

ここで、読み聞かせに用いた絵本のことに触れておきたい。図書館からの貸借本および根本から貸出しの絵本の中には、優れた米国の作家による絵本(翻訳)が含まれていた。例えば、エリック・カールの『はらぺこあおむし』やモーリス・センダックの『かいじゅうたちのいるところ』等である。これらの絵本は、挿絵も美しいが、こどもの心に働きかける豊かな発想と想像力を秘めており、幼児から高学年の小学生まで、楽しく聞いてもらえる作品であることがわかった。読み聞かせの活動をとおして、子どもたちにどのような絵本を提供するか、という私たちの側の文学・芸術に関する素養も問われてくることを実感した。

## 2. 支援者としての学習——「にじいろクレヨン」による協力と助言

「こどもの絵本の庭」の活動が第二週目に入った時、担当者の負担を考慮して、活動を週三日として月、水、金と曜日を確認した。ただし、午前と午後の開催時間はこれまで通りとした。このような曜日の決定により、活動が落ち着き、続けやすいリズムが生まれたことは幸いであった。なお、図書館から借り出した絵本は、活動日の終わりに森口記念館のホールにしまい、スポーツ用具等は開催日以外にも自由に利用してもらうこととした。

第5日の4月6日(水)は、午前・午後共に山崎教授が担当した。

第6日の4月8日(金)は、午前に大谷教授、山崎教授、根本が担当した。参加した子どもたちは、

小学生（男3、女1）、中学生（女1）で、活動の内容は、読み聞かせ、自由な読書、紙風船遊びであった。午後は根本が担当し、参加したこどもたちは、小学生（男2、女1）、中学生（女1）、高校生（男1）、高校卒業生（男1）であった。午後には、「にじいろクレヨン」の方々（柴田氏、他2名）が手伝いに来てくださった。「にじいろクレヨン」が企画をリードして下さり、自己紹介から始めて、風船バレーボール等のゲームをし、最後に絵本の読み聞かせを行った。このグループと共に活動をして学んだことは、こども支援の活動には技術が必要であるということであった。狭いホールでボール遊びをするには風船が役立つ、ということに私たちは思い至らなかった。また、活動のメニューを決め、こどもたちがみんなで参加する、ということも行ってきていなかった。最初はこどもたちと楽しく遊び、その後「にじいろクレヨン」のメンバーが、図書館の蔵書から選んだ一冊の絵本の読み聞かせをすると、こどもたちは静かに、よく集中してお話に耳を傾けた。このような会の進め方には、大いに学ばされるものがあった。

午後の会の後に、「にじいろクレヨン」の主宰者である柴田氏より助言をいただいた。その第一は、活動の時間内にはルールが必要である、ということであった。（たとえば、この間は機器によるゲーム遊びは認めない、等。）第二は、参加者の中で最年長の高校卒業生をリーダーとして育ててはどうか、ということであった。すなわち、参加者が自ら会を持続できるようにする、ということである。この第一の助言は、その後、参加者のこどもたちだけでなく、まわりの大人たちにも当てはまることを知った。すなわち、活動の時間帯は、ホールにあるテレビのスイッチは切っておいていただく、等のことが求められるということである。

「にじいろクレヨン」のグループは、次週以降も継続して（水曜日の午後に）来てくださることとなった。以下に、この後の三回の活動を簡潔に記す。

第7日の4月11日(月)は、午前の担当が根本。参加したこどもたちは、小学生（男1、女1）、大人（女1〔高齢のご婦人〕）であった。午前の時間の最初に、河北新報社（報道部）の取材があった<sup>(5)</sup>。

河北新報社から来られた記者とカメラマンの二人は若い方々で、取材中に、トランプ等子どもたちの遊び相手をしてくださったのが印象深かった。また、『スターズ・アンド・ストライプス』(*Stars and Stripes Newspaper*)の通信員マーク・アレン氏が、こども支援の活動の写真を撮っていかれた。活動の中では、参加者の小学生の男子が絵本『ぐりとぐら』の読み聞かせをしてくれた。午後も根本が担当。参加者は、午前のメンバーに小学生1名（女子）が加わった。本学学生の佐藤夏実さん（経営学部2年生）が参加し、活動を援助してくれた。こどもたちは、若い学生の参加を喜んでいた。

第8日の4月13日(水)は、午前の部は山崎教授が担当。午後の部は根本が担当した。参加者は、小学生（男1、女3）であり、その中女子1名は石巻商業高等学校の避難所の子で、今野次長が車で往復の送迎をしてくださった。本学避難所の外からの参加があったことは、嬉しいことであった。午後は、「にじいろクレヨン」の方々（柴田氏、他）がゲームと読み聞かせの企画をして下さり、佐藤さんも協力してくれた。

「にじいろクレヨン」が、初回以来、風船バレーボールその他、室内でも行える様々なゲームを教えてください、こどもたちが楽しく充実した時を持てるようになった。ただ、この日に行った硬めのボールを転がしてのドッジボールでは、ボールが物に当たる等、やや騒音があり、今後の工夫が求められる反省の材料となった。

この日には、「にじいろクレヨン」より、多くの児童書と絵本を「こどもの絵本の庭」に寄贈してくださった。根本の友人からの寄贈書も加えると、こどもたちのための本は大分充実したものとなった。そのため、図書館から借用した本はいったん森口記念館ホールにしまい、それ以外の本をカートに置いておくこととした。

「こどもの絵本の庭」の活動を知って、学内でも図書以外の物資（スケッチ帳、クレヨン、キャンディ、小さいこどものためのクマの縫いぐるみ等）を提供して下さった方々がおられた。こども支援の活動が、学内にもこのような温かい雰囲気を生み出したことは、活動の貴い成果といえよう。

第9日の4月15日(金)は、午前の部を大谷教授が担当して下さった。参加したこどもたちは小学生2名で、その中の1名(女子)は、東松島市大曲在住の子で、中里在住の祖母と共に参加した。活動内容は、読み聞かせ、バドミントン等であった。午後の部は、佐藤さんが担当してくれた。

### 3. 活動の最後の週——残された課題

第10日の4月18日(月)は、午前は根本が担当し、山崎教授も協力して下さった。参加したこどもたちは、幼児(男1)、小学生(女2)の計3名であった。参加者の中の2名(小学2年生の姉と幼稚園児の弟)は、祖母と共に参加した。(これらのこどもたちは東松島市在住で、姉と祖母は4月15日にも参加している。)活動の内容は、バドミントンと読み聞かせであった。

この日に、川崎市のあさのみ保育園の園児保護者有志一同の方々より、絵本62冊が寄贈された。こうして、寄贈の本が増え、内容も充実したものとなったため、本学図書館から貸与してもらった絵本は図書館に返却した。そして、それ以外の本は、常時エントランスホールに出しておくこととした。

こうして、ささやかな活動ではあるが、これが公のものとなり報道されることで、志を同じくするの方々によって支援の輪が広がることを経験した。しかし、後の章で触れることになるが、このような支援を十分に生かすには、それなりの技術と力量が必要であり、この活動には、まだそれらが乏しいことに気づかされた。

この日の午後の担当は、廣瀬裕作准教授(有志として担当下さった)、本学学生の佐藤さん、根本であった。参加したこどもは、小学生1名(女子)のみであった。活動としては、バドミントンと読み聞かせを行った。

震災から日が経ち、気候としても暖かくなり、こどもたちは外でも遊ぶようになった。ボランティアの方々が、外でのこどもたちの活動を見てくださることもあった。このような状況のもとで、「こどもの絵本の庭」に参加するこどもたちの数が少なくなったのもごく自然なことであった。また、わたくしたちのこども支援において、まだ指

導の技術が伴わず、活動が十分充実していなかったことも、コンスタントにこどもたちが参加しない原因であったかもしれない。

第11日の4月20日(水)は、午前が大谷教授の担当で、参加したこどもは3名であった。この時間は、こどもと共に本を読んだ。午後は、本学学生の佐藤さんの担当で、「にじいろクレヨン」の方々が来て下さった。しかし、あいにく入浴サービスの車が来ていたため、こどもたちは参加できなかった。

第12日の4月22日(金)は、「こどもの絵本の庭」の活動の最終日であった。4月末で本学避難所が閉じられることから、それに伴って、こども支援の活動も少し早目に終了することとなった。この日の午前の担当は、山崎教授、指方研二准教授、輪田直子准教授(有志として担当)、根本(途中から協力)であった。参加したこどもは、幼児(女1)、小学生(男2、女1)の計4名であった。活動の内容は、シャボン玉遊び、フリスビー、読み聞かせであった。

最後の活動において、化学を専攻する指方准教授がシャボン玉遊びを紹介してくれたため、遊びに変化が生まれ、こどもたちはとても楽しそうだった。また、CDで音楽もかけ、楽しく和やかなひとときとなった。この経験から、コンスタントな活動の中にも、工夫と楽しい雰囲気作りが必要であることがわかった。

午後は、輪田准教授、廣瀬准教授、佐藤さん、根本が担当した。参加したこどもは、小学生(男1、女1)、中学生(女1)の計3名であった。活動としては、風船バレーボールその他のゲームと読み聞かせを行った。特に、この時間が「こどもの絵本の庭」の最後の活動であることを意識して、こどもたちと皆で一緒に活動した。

### おわりに——「こどもの絵本の庭」の活動の意義と長期的展望

「こどもの絵本の庭」は、約3週間の短期のこども支援として行われた。

以上の章においては、三つの段階に分けて支援の概要を報告した。最後に、今回の活動の総括として、絵本およびレクリエーションによる支援の意義と今後の展望についてまとめてみたい。

まず、今回の支援をひとまず終えての全体としての印象を述べておきたい。4月22日の最終日から少し経った4月28日(木)に、山崎教授と共にエントランスホールの後片付けを行った。この日は、本学の避難所が閉じられるために、朝、避難者の方々が片づけを終えて移動するところであった。そのため、「こどもの絵本の庭」に参加してくれた一部のこどもたちとその保護者の方々にも会うことができた。こどもたちも保護者の方々も、私たちのささやかな活動に感謝してくれて、嬉しく思った。被災者の方々との温かい交わりが与えられたことはもちろん、絵本やレクリエーションを通して、ささやかながら、こどもたちの成長のための働きかけをすることができたことはありがたかった。

本稿の第2章で、柴田氏からの、活動の時間のルールについての助言に触れたが、こどもたちへの支援は、彼らをただ楽しませるのではなく、彼らの人間としての成長に資するものであることが必要なのである。それは、「教育」の一部を担うものである、とも言い得るであろう。

「教育」という観点から今回のこども支援をとらえ直してみると、私たちに残されたいくつかの課題と、また、今後に向けた可能性が見えてくるであろう。

その第一は、こども支援には、「教師」としての実力を培う必要があるということである。活動時間内のルールを作るなどして、こどもの好き勝手をさせるのではなく、人間として彼らが成長するように配慮することが肝要である。そのために、支援をする私たちにも研究が必要なのである。

その第二は、長期的な展望に立った、支援の見通しを立てる、ということである。第3章でも述べたように、今回私たちの活動を知って、あさのみ保育園等から、多くの絵本をいただいた。その他寄贈された本も含めて、それらは、こども支援の短い期間に活かされたものの、その後は図書館に預っていただいている。こども支援は、本学避難所は終わりとなったものの、震災からの復興を目指しての、さまざまな困難のただ中にある近隣の地域への奉仕等を考えれば、長期的に必要なとされるものであろう。その意味で、今後は、これらの温かい援助をどう用いていくかが課題となるで

あろう。

私たちが今後取り組むべきこども支援のための研究と、貴い物資を活用する責務を思う時、「こどもの絵本の庭」の活動は、まだ緒についたばかりであることに気付かされるのである。

## 注

- (1)その後、避難者の数は減少し、3月末から4月6日(水)の各日の本学の避難者数は230名程度であった。
- (2)これらの蔵書には、石井桃子、石倉欣二、いわむらかずお等優れた日本の絵本作家の作品だけでなく、エリック・カール、モーリス・センダック等著名な海外の絵本作家の作品も含まれていた。
- (3)この名称は、スコットランドの作家、ロバート・ルイス・ステューヴンソン (Robert Louis Stevenson, 1850-94) の詩集『こどもの詩の庭』(*A Child's Garden of Verses*, 1885) にヒントを得たものである。
- (4)この日の三陸河北新報社の取材の記事は、4月12日の『石巻河北』に掲載された。
- (5)この日の河北新報社の取材の記事は、4月12日の『河北新報』(朝刊)に掲載された。